

<陳述書（抜粋）>

大学三年生になった頃、進路を決めるタイミングになりました。家庭連合の職員になりたいなとぼんやり考えていたそんな時に、安倍元首相の銃撃事件が起きました。突然、家庭連合に対するあらゆる罵詈雑言が浴びせられましたが、そのほとんどは私の知らない内容でした。これまで私が信じてきたものは間違っていたのか、家庭連合に就職したら私の将来はどうになってしまうのか、不安ばかりが襲ってきました。

しかし、私の知っている教会、私が出会ってきた人々を否定することはできませんでした。私が一番大切にしたいものは何なのか、なぜ信仰を持って生きているのかを振り返ると、自分の人生が救われたきっかけが家庭連合だという事実は否定できません。悩んだ末に私は事件以降にも関わらず、家庭連合の職員になるという強い意志を固めました。

家庭連合が解散命令を迫られる中でも、今年も家庭連合に就職を希望している学生や青年が三十人もいました。このような時期になぜ家庭連合の職員になることを選んだのか。それぞれに深い理由があります。そのような二世の姿を直接見ていただくためにも、私は利害関係参加の申立て、裁判に関わりたいと思っています。

解散命令を訴える方々の中には信仰は教会が無くなったとしても続ける事はできるという主張がありますが、信仰に立ち返る場所が無くなるという事がどれほどの悔しさを秘めているかを、どうして信仰を持った事のない人がわかるのでしょうか。信者の私たちにしか分からないことだと思います。

これまで現役信者の声は、ほとんどメディアで報じられる事はありませんでした。それはメディアの印象操作だけのせいにはできません。安倍元首相の銃撃事件が起きた当初、多くの信者は迷いや不安に苛まれ、自分の姿をメディア等で晒される事に恐怖を感じていました。私自身、自分が声を発しなくとも教会の上の立場の人が解決してくれるはずだ。何とかなるだろう。このような甘えた考えがあり、行動することができませんでした。

しかし、東京地裁における「解散命令」の決定を聞いた時、大きな衝撃を受けました。本当にこのまま私たちの教会は無くなっていくのか。これまで築き上げた信仰によるコミュニティはどうなっていくのか。事の重大さに伴い、不安が一気に胸に差し迫ってきました。私は二世として、自らが積極的にメディアにも顔を出し、家庭連合の信仰を証しながら、この立場でしか伝える事のできないことを訴えていくしかないと思うようになりました。そう決心した時、同じ思いを持つ家庭連合の現役二世の方から、利害関係参加の制度を利用して、裁判に参加できる可能性がある事を聞きました。もし今回の裁判に参加する事が出来れば、被害者の声だけではなく、現役信者の声を少しでも反映する事ができるのではないかと期待しています。